

報告

ユニバーサルデザイン天文教育研究会イン山梨
～プラネタリウムにおける聴覚情報保障～

高橋真理子（山梨県立科学館／星空工房アルリシャ）、嶺重 慎（京都大学）、
北村まさみ（つくばバリアフリー学習会）、高橋 淳（茨城県立水海道第一高等学校）

1. はじめに

ユニバーサルデザイン天文教育研究会は、2010年と2013年に国立天文台において開催された。それらは100名以上の参加者が集う大規模なものであったが、「テーマをしぼった小規模のものでいいので、ぜひまた開催してほしい」という意見が多数寄せられた。[1]そこで、山梨県立科学館のプラネタリウムでユニバーサルデザインを目指した番組を上映していること、要約筆記つき星空解説を行うことをきっかけに、「プラネタリウムにおける聴覚情報保障」をテーマにして研究会を開催したので、ここに報告する。

2. 概要

日時： 2014年11月1日（土）
10：30～17：00
場所： 山梨県立科学館
スペースシアター、多目的ホール
参加費：無料（科学館の入館・観覧料も免除）
参加者： 51名
スケジュール：
10:00～ 受付
10:30～ プラネタリウム番組観覧
11:30～ 休憩
12:40～ プラネタリウム内での手話試写
13:15～ 実践発表
15:00～ グループディスカッション
16:30～ ディスカッション内容の共有
17:00 終了

3. 内容

3.1 参加者の顔ぶれ

参加者51名のうち、聞こえない・聞こえにくい方12名、情報保障担当の方18名（要約筆記9名、手話9名）生涯学習施設職員6名、ボランティアスタッフ5名、山梨県立科学館スタッフ2名が含まれる。2013年の研究会に参加していた方は、半分ほどであった。

3.2 プラネタリウム観覧

山梨県立科学館のプラネタリウムにおける、見えない人や聞こえない人たちとともに行ってきた活動は、また別稿であらためてまとめておきたいと考えているので（と、4年ほど前から思っているのだが・・・）、ここでは当日おこなった投影について簡単に紹介する。

2014年3月から投影しているプラネタリウム番組「ねえ おそらのあれ なあに？」は、当館オリジナルのキッズ番組（図1）で、当館のボランティアグループである「星の語り部」が制作したユニバーサルデザイン絵本[2]を元に、制作したものである。



図1 番組ちらし

お話に登場するのが、街に住む女の子、里に住む目が見えないキツネ、山に住む耳が聞こえないクマで、彼らは出会いながらどう互いにコミュニケーションするか悩む。街・里・山で見える星の数が違うことに気づき、その原因を学ぶ傍ら、星空は誰の上にも広がっていて、見上げれば互いを思うことができる、という展開の物語である。ユニバーサルデザイン絵本を貸出しして点図を触りながら聞かなくて、すべてのセリフに字幕がついているので、聞こえない人にも話の展開がすべてわかるような形になっている。

一方、山梨県難聴者中途失聴者協会の方から、ぜひともプラネタリウムを体験したいというオファーがあり、2014年11月に行っている投影の中で、字幕がついているものは上記の番組のみだったので、それをご覧いただき、その前に行っている星空解説に要約筆記をつけることになった。研究会の日程は、その投影にあわせて行ったわけである。

要約筆記付きの解説を行うのは、当館では今回がはじめてであった。デジタルプラネタリウムの一つであるユニビューを用いて、PC画面をドーム画面の中に組み込み、画面を出す場所を自由自在に変えることができる（図2）ので、説明している星座や星とほぼ同じ方向に文字を出すことができる。

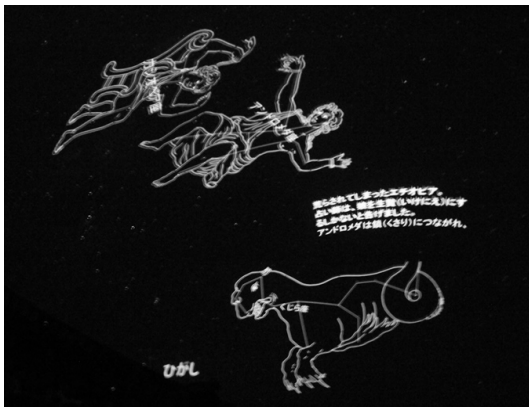


図2 要約筆記付き投影の様子

今回の研究会では、当館の一般投影が行われていない昼休みに再度、シアターに集まり、「ドームの中での手話実演」(図3)も行った。時間に限りがあり、星座解説をしている時間はなかったが、ドーム内での手の見え方などを見ていただき、手話を言語とするみなさんからさまざまなご意見をいただいた。

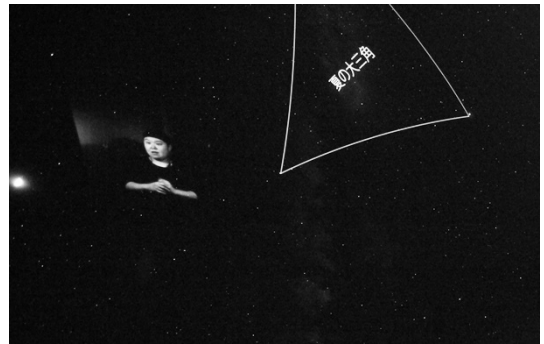


図3 プラネタリウム内の手話デモ

3.3 実践発表

実践発表者とタイトルは以下の通り。

- ・高橋真理子「山梨県立科学館プラネタリウムのユニバーサルデザインの取り組み」
- ・木梨恵二郎、徂徠裕子（つくばエキスポセンター）「聴覚障害者や外国人が楽しめるプラネタリウムへーつくばエキスポセンターの取り組み」
- ・成瀬裕子（かわさき宙と緑の科学館）「かわさき宙と緑の科学館 字幕付きプラネタリウム」
- ・嶺重慎（京都大学）「バリアフリー教材プロジェクト：手話版DVDの製作」
- ・長谷川晃子（JAXA）「プラネタリウムへの想い」

今回、参加者が体験したのは要約筆記付き生解説と、字幕付き（ナレーションがすべて字幕になっている）番組であったのに対し、つくばのプラネタリウムでは、ナレーションを簡素化した字幕を試みた事例、かわさきでは、生解説に職員がつくった字幕をキュー送りしていく事例（要約記者が介在しない）

と、それぞれ方法論が少しずつ違うものが紹介され、その後のグループディスカッションの格好の素材となった。また、嶺重氏は、現在制作中の手話がメインのDVDを紹介。長谷川氏は、プラネタリウムや実践発表に対する感想を手話でコメントした。小さいころ、説明が聞こえず、嫌になってしまったプラネタリウム以来、20年近くぶりに、素晴らしい満天の星空とわかりやすい解説を見ることができて、大変感激したと語ってくださった。



図4 実践発表の様子。

右側が発表者のパワーポイント、左側が要約筆記画面。中央に手話者が立つ。

3.4 グループディスカッション

今回の研究会の目的の一つは、プラネタリウムに対して、障害当事者の意見をたくさん聞くことにあった。5つのグループ（聞こえない人、聞こえにくい人、生涯学習施設職員がそれぞれのグループに分散）が、手話や要約筆記を入れながらのディスカッションを行った。話し合うテーマは以下に絞り、1時間半ほどのディスカッションであった。

- ・自己紹介
- ・午前中のプラネタリウムやデモについての感想、意見
- ・実践発表についての感想、意見
- ・当事者からの提案や意見

また、UD会議のお約束として、以下のようなことに注意をするように呼びかけた。

- ・発言者は挙手をして名乗ってから話す
- ・話の途中で割り込まない
- ・手話／文字通訳が伝え終わったのを確認してから話す



図5 グループディスカッションの様子

各グループでの話し合い後、どんな話がされていたかを共有する時間を設けた。そこから出されたものは、おおよそ以下のようなことがあった。

<午前中のプログラム全体について>

- ・大変満足。
 - ・プラネタリウムの体験はもうできないとあきらめていたので、すごく嬉しかった。
- （どちらも当事者の方からのご意見）

<要約筆記つき解説>

- ・要約筆記を行っている際、星空解説のポインターを文字から出ている場所から動かすとよいのでは。
- ・星空解説のときに「ここ」という指示語を使っていたときがあるが、(音声と字幕にタイムラグがあるので)なるべく控えたい。プラネタリウムでは頻繁に使う言葉であるが、西側など具体的な位置を示すようにしたらよいのではないか。
- ・要約筆記の文字について見やすい・見づらい、どちらの意見もあり。
- ・文字画面が星座の近くにくるのはよい。

＜字幕つき番組について＞

・番組のキャラクターに障害があるのは珍しく、それが良かった。特にコミュニケーションで悩むところは、いろいろな人の気づきになると思う。

・番組の字幕は少し早いのでは、と感じた。(要約していないので)登場人物によって、吹き出しの形を変えるとよかった。

・歌が進行中ということがわかりにくい。手話をつけてリズムと一緒にやれるとよい。

・音楽があるときには、ずっと♪～のマークを付けたほうがよい。(特にセリフがなくなる時には)

・キッズ向けだけでなくぜひ大人向けの番組もつくってほしい。

＜プラネタリウム内の手話について＞

・暗いと手話の人が怖く見える。明るさや色の工夫が必要。よいカメラを使ってほしい。

＜聴覚情報保障全体について＞

・手話や字幕など多様な方法を使ってほしい。

・字幕を出さなくても、番組前や後に内容を文字で書いて渡せるものがあるのもよい。

・今後、法整備が進み、今から地元で提案していくことも大切。

＜情報発信や共有について＞

・プラネタリウム側からの情報発信が弱すぎる。聞こえない人たちで、「手話」「難聴」「字幕」といったキーワードで検索している人たちは多いので、SNSなどもぜひ利用して発信してほしい。

・「聴覚障害者向け」とするより「字幕つき」などで発信してもらったほうがよい。

・施設で、聞こえない人にガイドしてもらったり、手話の有名人に来てもらったりするのもよいかも。

どのグループも大変活発に意見交換がされ、有意義な時間となった。

4. 参加者からの感想

＜聞こえにくい方＞

・私に何ができるか。今日ここに参加している人は皆、同じ思いで来ていると感じた。川崎の方の発表にあった、「100人のろう者と出会おう」のように「声」が集まれば行政は動いてくれると思う。この場をきっかけに「声」が広がり大きくなればいいと思う。今の子どもたちは、夢を持つチャンスがいくつもあると感じた今日だった。

・作り手も見る側も一緒になって作りあげ。これが一番印象に残りました。

＜聞こえない方＞

・地元のプラネタリウム館でも話し合ってもらいたいと思います。有意義な時間でした。

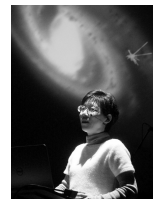
＜プラネタリウムの方＞

・ユニバーサルデザインについて知識ばかりが先行し、どうしたらいいかわからず、相談相手がない状態でした。今回、企画する側も、当事者のお話も直接聞くことができ、大きな一歩を踏み出せたような気がしています。

一度顔をあわせたのちに、共に仕事をするということを通して、いろんな立場の方巻き込んで続けていきたいものである。

文 献

- [1] 嶺重慎「第2回ユニバーサルデザイン天文教育研究会～共有から共生、共働へ」、『天文教育』vol.26,No.1,126号,2014
- [2] ほしのかたりべ作、みついやすし絵「ねえおそらのあれなあに」NPO法人ユニバーサルデザイン絵本センター出版



高橋真理子

info@alricha.net